

謎の長頸瓶「壺G」の用途-仏具花瓶説を古代ムラ遺跡で検証してみたら

藤 由美

2017年7月27日、八千代市立郷土博物館に用があって寄った際とのこと。博物館員のTさんが「さっきこの近くの発掘調査現場で、長頸瓶の『壺G』が出たって。一緒に見に行きましょう」と現地に案内してくださいました。

現場は博物館の南側の畑、殿内遺跡の一角で奈良・平安時代の遺構が検出されている場所。住居跡らしき遺構から取り上げたばかりの細長い須恵器の壺は、まだ土の湿り気をまとったまま、夏の日差しの下で鈍く光っています。手にしてみると「まさにあなたが追っかけている八千代の壺Gですよ」と語りかけてくるようでした。



写真：殿内遺跡から出土したばかりの壺G

用途不明の謎の須恵器「壺G」とは？

八千代市立郷土博物館には、この形の長頸瓶が二点、ひっそりと展示されています。八千代市内の古代遺跡「村上込の内遺跡」と萱田遺跡群の「北海道遺跡」からした出土した須恵器です。このほか萱田遺跡群の「井戸向

遺跡」からも同形の須恵器の壺Gが一つ出ていて、この夏の新発見の壺は、市内4例目の「壺G」でした。

壺Gとは、頸が長い高さ20cm位のほっそりとした長頸瓶のことで、自然釉がかかった優雅で堅牢な須恵器です。奈良文化財研究所が、須恵器の壺の形状をアルファベット順に分類した際、「G類」に定められた須恵器であることから、「壺G」とよばれました。器形は、太型・中太型・細型に分類され、中太型・細型は北日本から関東、東海・近畿地方まで広く分布しますが、細型の時期は784～794年の長岡京の時代に限定される特徴があり、ほとんどが平底で、糸切痕やロクロ回転痕を未調整のまま残すなど、やや雑なところにかえて素朴で味わい深いおもむきがあります。

私が、「壺G」の用途に興味を抱いたのは、2007年、国立歴史民俗博物館（歴博）で開催された企画展示「長岡京遷都一桓武と激動の時代ー」に、村上込の遺跡の壺Gが、武蔵国府や佐倉市、酒々井町から出土した壺Gなどと並んで展示されていたことからです。

村上込の内遺跡は、「古代のムラ」として注目された遺跡で、開館当時の歴博には、そのムラの様子を再現したジオラマが展示されていました。八千代の遺跡からの出土品が、なぜ長岡京がテーマの企画展に展示されているのかということにも興味がそそられました。この壺Gの用途について「東北遠征軍隊の水筒」と解説されていたことは驚きました。

「水筒説」は長岡京跡の調査に携わった山中章氏の説で、関東から東北への分布と、「堅牢で、ひもで肩からつり下げるのに適した形」、「東北の城柵から少量の発見例があり、桓武朝における東北遠征にともなう兵士や都から

下る官人の携行品である」というのです。ほんとな、竹筒や皮袋や桶に比べ、重そうなのに容量は少な目で使いづらそう、というのが、その時の私の率直な感想でした。

そういえば、藤枝市立郷土博物館での志太郡衙跡に関する展示では、出土した荷札木簡の記述から、壺Gを『堅魚煎汁』の貢進のための容器」として、壺Gを2個一括りにし、再現した荷札木簡を付けてあったことをかすかに思い出しました。この堅魚煎汁容器説は、巽淳一郎氏が1991年発刊の『新版 古代の日本 近畿Ⅱ』などで述べられていることから、広く知られた説です。

調べてみると、壺Gの用途については、兵士の水筒説・堅魚煎汁容器のほか、徳利説・花瓶（ケビヨウ）説など諸説あって定まらないというのが実態で、その謎は深まるばかりでした。

兵士の水筒とか、堅魚煎汁の容器とした場合、壺Gの用途と八千代の遺跡の立地と関係は説明できるのかしら？ 壺Gの本場、静岡県に行くことでもあったら気にとめて見てみようかな、そう思っていた矢先のことでした。

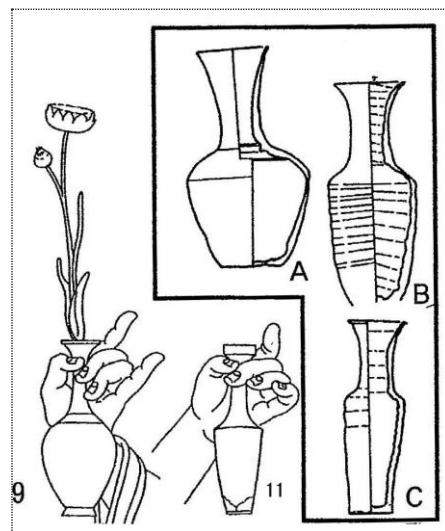
「壺Gは仏具花瓶」説と出会って

その年の2007年10月、静岡市へ行った際に、静岡県埋蔵文化財調査研究所に立ち寄って、壺Gの研究をされている佐野五十三さんにお話を聞く機会に巡りあいました。この日は斎藤忠先生の講演が予定されていたのですが、ご高齢の斎藤先生のご体調に配慮して、急遽、壺Gの用途をテーマした所長の佐野さんの講演となったとのこと。壺Gの実物を見せていただきながら、お聴きした壺Gの用途の説明は、まさに「目からうろこ」でした。

佐野さんの説は仏教用具としての「花瓶」説。仏像・絵画などの資料に残る花瓶を検討整理する中で、観音像の持つ古代花瓶の形状と須恵器壺Gの変遷の関連を分析し、その形態と時期が一致することを指摘され、「仏の手

を離れて自立式となり、花活けの花瓶となった須恵器こそ壺Gである」と述べておられました。

図 仏像の持つ花瓶と壺G



9：奈良法輪寺、11：靈山寺の十一面観音
（佐野五十三氏の図の一部を抜粋）

そういえば、私はその3年前、古代の十一面観音像をたずねて、滋賀県や若狭の観音霊場を巡りました。その時拝観した渡岸寺や羽賀寺の十一面観音の持つ花瓶が印象的でしたので、仏像の持つ花瓶に着目した佐野さんの説には強く惹かれました。

佐野さんはまた、壺Gと出土した遺跡の分布の関連を整理し、「壺Gは、古代の公的な施設・機関に係る遺跡が圧倒的に優位であること」、「集落からの出土も一般的」で、東国では竪穴住居から奈良三彩・金銅仏などが出土していることも指摘されています。

さらに、千葉県袖ヶ浦市遠寺原遺跡・山梨県韮崎市宮ノ前第Ⅱ遺跡、群馬県佐波郡十三宝塚遺跡の壺G出土遺構と遺跡全体の様相を例示し、壺Gが村の寺や仏堂などの遺構に付随する遺物であること、そして行基のような僧を介した東国へ仏教伝播とともに、その分布も広がったと述べられておられました。

この佐野さんの花瓶説で、壺Gが出土した

遺跡を見直してみよう、遺構や遺物を古代仏教との関連で分析したら、遺跡の性格と同時に、壺Gの用途も解明できるかもしれない。まずは、素人の私でもできる検証は、八千代市や千葉県内、埋文センターの図書室で、分厚い発掘調査報告書から地元の遺跡のデータに向き合うことでした。

壺G出土の千葉県の遺跡をみる

佐野さんの「壺Gは仏具の花瓶」という説を検証するため、千葉県内の遺跡の調査報告書から、壺G出土の遺跡とその遺跡から複数出土した仏教関連の遺物を片端から抜き出してリストにしてみました。(右の表)

この表の1~8は、佐野さんの論文「須恵器花瓶の成立」(『静岡県考古学研究』No.30 1998)でも例示されている遺跡、9~16は、私が拾い出したデータです。

その結果G壺が出土した遺構やその近辺のほとんどで、「寺」「仏」銘の墨書土器・仏鉢・三彩の托や壺・水瓶・香炉・瓦塔などの仏教関連の遺物が出土し、またお堂を思わせる四面庇建物跡や総柱建物跡が検出されている事例もありました。中でも10の草刈遺跡の壺Gは、浄瓶や薬師如来の持つ薬壺など多くの遺物と共に、一つの住居跡から出土しています。

このほか、墨木戸遺跡(酒々井町)・駒形遺跡(千葉市)・根崎遺跡(千葉市)からも、壺Gが出土していますが、発掘調査報告書の中で、壺Gを仏器の一器種として遺跡の性格の考察を試みていたのは、『墨木戸遺跡(第2次)』(1999)だけでした。

八千代市の村上と萱田の古代遺跡では

さらに、遺跡の性格を詳しく知るために、八千代市の村上込の内遺跡と萱田遺跡群遺跡についての報告書から、遺跡中の壺Gの出土状況を見直し、仏教関連とおぼしき遺物・遺構を拾い出して、遺構実測図の上に壺Gとプ

ロットする作業をしてみました。

表 千葉県の壺G出土遺跡と仏教関連遺物

	遺跡名	市町名	出土仏教関連遺構・遺物
1	海神台西	船橋市	墨書土器「岑寺」
2	北海道	八千代市	墨書土器「勝光寺／大田」・「尼」・「経」
3	井戸向	八千代市	仏鉢、三彩托、三彩小壺2、銅造宝冠如来像、山吹双鳥鏡、墨書土器「寺坏／寺」・「佛」、火打金
4	庄作	芝山町	仏鉢、瓦塔、墨書土器「井／佛西」
5	真行寺廃寺	山武市	仏鉢、浄瓶、香炉蓋、瓦塔、墨書土器「武射寺」・「大寺」・「仏工舎／小」、文字瓦「寺／寺口」
6	台畑	千葉市	墨書土器「寺吉」・「寺」他
7	南河原坂窯跡群	千葉市	仏鉢、水瓶、香炉蓋、高坏形香炉、墨書土器「塚寺／上」
8	川島	富津市	水瓶、香炉蓋、高坏形香炉
9	柳台	匝瑳市	仏鉢、浄瓶、墨書土器「千俣口(仏カ)」
10	草刈	市原市	灰釉浄瓶、薬壺、佐波理製箸、墨書土器「草刈於寺坏」
11	永吉台	市原市	四面庇建物、瓦塔、仏鉢、銅鏡、香炉蓋、墨書土器「土寺」・「田寺」・「山寺」・「寺」
12	坊作	市原市	墨書土器「法花寺」・「佛騰」・「造寺」
13	高岡大山	佐倉市	四面庇建物、銅鏡、瓦鉢、香炉、墨書土器「寺」・「佛」・「神」
14	臼井屋敷跡	佐倉市	三彩托、総柱建物
15	村上込の内	八千代市	仏鉢、瓦塔、灯明皿、火打金、墨書土器 他多数
16	谷津貝塚	習志野市	瓦塔片、灯明皿、墨書土器「中村寺」

現在、村上団地となっている新川東側の村

上込の内遺跡は、古代の「村神郷」の一部とされるひとつのムラでした。この遺跡の古代集落は、出土した土器から、8世紀前半～9世紀後半の約百五十年の間に、I～V期の5段階の変遷をたどったとのこと。この8世紀前半という時期は、養老7年（723）「三世一身法」の施行により、郡司層による開墾が進み始めたころでした。

この時期の住居跡155軒と掘立式建物跡24棟は、集落中央の住居のない広場の周りに、A～Eまで5つのブロックに分かれて展開しています。墨書土器は270点にのぼり、D群では「来」・「毛」の字など、同じ文字の土器がブロック単位でまとまって出ていることから、一族のような単位集団が何世代かにわたって同じブロックに住み続けたとのこと。このムラは8世紀後半から9世紀前半にかけて最盛期となり、9世紀後半には家数が減少、そして10世紀頃には生活の痕跡が消えていったとのこと。

村上込の内遺跡について、千葉県史や八千代市史が仏教関連の遺物としているのは、A群の北の谷の縁から出土した瓦塔の破片のみですが、宗教関連と思われる遺物を、報告書からさらにピックアップしてみました。

その結果、A群では長頸瓶、「奉」・「前卍」銘の墨書土器・掘立建物3棟、B群では灯明皿、C群では太型の長頸瓶と掘立建物4棟、D群では完形の壺Gほか太型・中細型頸部・胴部破片など須恵器の長頸瓶が計7個体、灯明皿、「聖」銘の墨書土器と掘立建物13棟、E群では掘立建物4棟が検出されていました。

墨書の「前卍」の「卍」は「菩薩」の文字の冠の略、また古代の「聖」は「釈迦ないし仏法の徳を秘めた聖人」を意味します。

また、D群からは、官人の存在をうかがわせる帯金具や刀子や掘立建物なども見つかっています。このD群には「来」の墨書で土器を区別する有力な一族が存在して、村上込の内の集落全体をリードしていたことでしょう。

その単位集団内には、お堂もあって、灯明を捧げ、花を供えて、仏を礼拝する人々の生活が営まれていたのではないかと思います。

一方、新川西岸の萱田遺跡群の構造については、笹生衛さんが「古代仏教信仰の広がり」と受容」（『神仏と村景観の考古学—地域環境の変化と信仰の視点から』2005）の中で、古代仏教施設を「寺院」・「寺」・「堂」に分類整理し、「集落内の仏堂・仏教関連遺物のあり方」の事例として明らかにしています。

萱田遺跡群で明確に仏教信仰の跡を確認できるのが、白幡前遺跡2群A内の南側の遺構です。ここには周囲が溝で区画された四面庇の掘立建物があり、瓦塔・瓦鉢・浄瓶・「寺」や「佛」銘の墨書土器などの遺物が集中していることから、集落全体の「村寺」といえる仏教施設があったと考えられています。

このブロックの北隣の白幡前遺跡I群Bと、寺谷津の北側の井戸向遺跡第I群では、単位集団に付属した一族の持仏堂があり、白幡前遺跡の他の2つのブロックと井戸向遺跡第II群では一族の内に仏教に帰依した人物がいた程度、さらに北の北海道遺跡では「勝光寺」の墨書土器のみで仏具類は確認できず、権現後遺跡では仏教関連の遺物は全く見られないとのこと。

萱田遺跡群では、白幡前遺跡2群Aブロックの「村寺」を拠点として単位集団ごとに仏教信仰が浸透していき、このブロックから離れた北海道遺跡から権現後遺跡にかけては次第に希薄になると、笹生さんは考察されています。

壺Gについては、笹生さんは仏具とみなしていないので、以上の検討の要素とはなっていませんが、壺Gを検出した井戸向遺跡や北海道遺跡など、「村寺」から離れた集落でも、小さなお堂、または住居内に仏の小像や絵を祀り、一輪の花を壺Gに入れて供えていたのではないのでしょうか。当時もムラの中に階層があったとのことですが、庶民層にも、道教

の呪いとともに、仏教が浸透していった姿が感じられます。

壺Gとの新たな出会い

八千代市郷土歴史研究会では、2013年の調査研究テーマとして、市内の「旧村上村の総合研究」を取り上げました。私は、村上地区の調査報告の一課題として、「村上込ノ内遺跡と同遺跡出土の長頸瓶（壺G）について」という題名で、11月発刊の同会の機関誌に投稿しました。

その後、新たに報告された壺Gに出会ったのは、翌2014年1月24日、八千代市の隣の習志野市の総合教育センターで開かれていた「谷津貝塚出土資料展示会」でのことでした。

習志野市の津田沼駅南口の区画整理地区で行われた最近の発掘調査で、「谷津貝塚」は奈良～平安時代の集落跡中心の遺跡であることがわかりました。（「貝塚」といっても縄文貝塚ではなく、古墳後期から近代までの小規模な貝層を伴う遺構とのことです。）

この展示会では、谷津貝塚の古代集落跡から出土した壺Gが、瓦塔など仏教関連遺物と共に展示されていました。調査報告書は出たばかりとのこと。さっそく展示品の写真を撮りましたが、壺Gについての説明はありません。「仏教信仰の浸透」のコーナーでは、出土した瓦塔片や灯明皿、「中村寺」の墨書土器から「仏教儀礼との関連を強く窺わせる」と述べつつも、残念なことに、「仏堂相当の建物や僧侶の使う仏具類も出土していないので、中村寺も集落外の寺を指す可能性が高い」と解説していました。

そしてその翌月の2月22日、明治大学博物館友の会会員発表会で、「古代集落遺跡から探る謎の須恵器『壺G』の用途」の題名での発表の機会をいただき、谷津貝塚の最新事例も含め、スライドで図や写真を使い、壺Gとその用途についての拙い話を、会員の皆様にお聴きいただきました。

それから、博物館や資料館に展示された壺Gを見て回りました。どこも、壺Gの用途の解説はなく、あっても千葉市埋蔵文化財センターの展示のように、「用途は、堅魚煮汁説・軍隊水筒説・花瓶説等あるが、まだ不明」との説明にとどまっている状況でした。

かくして、やっと納得のいく展示解説に巡り合ったのは、昨夏のこと。2017年7月18日から始まった習志野市の小企画展「どうしてこのカタチ？～モノからわかる奈良・平安時代の谷津貝塚～」での壺Gの展示とその解説です。

谷津貝塚の壺Gと古代仏教関連遺跡についての前回（2014年）の解説から、今回の展示ではどのような考察しているのだろうと想像していたのですが、「花瓶」説を有力な説として評価し、「8世紀から9世紀初頭、古代仏教が地方へ波及するに伴って寺院などに供えられたもの」と述べられていたのです。同じ遺構から出た油煙の残る土師器を灯明具として仏教祭祀が行われた可能性と、墨書土器銘の「中村寺」との関連もうかがえるとの考察は、この遺跡と壺Gの意義に迫るものでした。

さらにうれしかったのは、冒頭に書いたように、それから十日もたたないうちに、八千代市村上の殿内遺跡の発掘現場で、出土したばかりの壺Gに出会えたことでした。

殿内遺跡では、25年前の博物館建設に伴う調査で、古代の住居跡36軒がみつかっています。また、その台地の裾には鎌倉時代の清凉寺式釈迦如来像を伝える正覚院があります。まだ報告書は出ていませんが、殿内遺跡の古代の集落の中に、花を挿した小さな長頸瓶を仏前に供えて祈る民衆の姿が浮かんできます。

素朴な疑問から発した「壺G」の用途の検証ですが、出土した地元の遺跡の性格から、やはり「仏の御手の花瓶からその形をいただいて、仏の御前に供えるための花瓶となった須恵器」という確信を強くした次第です。